

ラジオNIKKEI ■放送 毎週木曜日 21:00~21:15

# マルホ皮膚科セミナー

2011年2月17日放送

第26回日本臨床皮膚科医会総会①

## 「総会を終えて」

大path皮膚科医院 院長  
大path 昌孝

### はじめに

もう昨年のお話となつてしまいましたが、5月29日（土）、30日（日）に第26回日本臨床皮膚科医会総会および臨床学術大会をお台場のホテルグランパシフィック Le Daiba にて開催させていただきました。

幸い1082名という多数の方々のご参加をいただき、盛会のうちに無事終了することができました。ご参加いただいた皆様には会頭として心より御礼申し上げます。

会期中、「東京はスタッフが揃っていてうらやましい」というお声を多数いただきました。東京支部の理事には各大学で医局長を務めた経験を持つ先生が多く、学会の主催者側での仕事経験も豊富です。今回も私が各担当を振り分けただけで、後は各理事の裁量で準備を進めました。もちろん私の采配の妙ともいえますが、やはり理事全員の協力と頑張りなしには会を成しえなかったであろうと思っています。この場をお借りして理事の先生方にも御礼を申しておきたいと思ひます。

### 「今、そして未来へ…」

会を準備するにあたり、私の考える日臨皮らしい会にしたい、形式に捕われることなくやりたいことをやる会にしたいと考えました。それが基本方針でした。テーマは「今、そして未来へ…」、皮膚科医や皮膚科学の現状を認識し、将来への展望を考えていこうというコンセプトを立て、自分ならこんな話が聞きたい、こんな演題なら参加したいという話題を選び、演者の各先生方に依頼しました。当方で依頼した、皮膚科以外の先生方のお話を特別講演、皮膚科の先生方のお話を主催セミナー、各メーカーの準備した講演を共催セミナーと呼び分けたのも新しい試みだったかと思ひます。

まず29日に行われた日本臨床皮膚科医会総会では、永年会長を務められた加藤友衛

先生が退任され、若林正治先生が新会長として承認されました。さらに矢口均常任理事の副会長昇任など日臨皮本部の新体制が発足いたしました。

また、今回の総会の重要な決定事項といたしまして、日臨皮の各支部を基本的に都道府県単位にすることとなりました。従来の10支部はブロックと名称を変え存続いたします。この都道府県単位の支部活動は日臨皮創設時からの目標であり、今回やっと実現への第一歩を進めることとなったわけです。

## **臨床学術大会**

総会に続き開催された臨床学術大会の内容もご紹介したいと思います。昨年は2年に一度の診療報酬改定の年であったことと、日臨皮は開業医中心の会であることからどうしても診療報酬の話題を避けて通ることはできません。特別講演ではまず今回の診療報酬改定について、医師会の立場から日本医師会常任理事の葉梨之紀先生に、中医協の立場からは昭和大学名誉教授吉田英機先生に、厚生労働省の立場からは厚生労働省保険局医療課課長補佐井内努先生にお話しいただきました。今回は10年ぶりのプラス改定ではありましたが、急性期入院医療に大部分が配分されるなど、従来以上に大幅な配分の見直しが行われたことなどが主な内容でした。

また今回のテーマ「今、そして未来へ…」にふさわしく、「皮膚科疾患における未来医療」と題して、大阪大学臨床遺伝子治療学教授森下竜一先生に遺伝子治療、細胞治療、再生医療、核酸医薬など次世代分子治療への期待と可能性についてお話しいただきました。他にも国立感染症研究所感染症情報センター予防接種室室長多屋馨子先生にワクチンのお話を、そして「医者の不養生、少しでも永く現役を続けるために」というテーマで日本臨床内科医会常任理事菅原正弘先生に依頼しました。先生には医者自身の健康管理7つのポイントとして、我々医師が元気で長生きできる方法を教えていただきました。

皮膚科の先生方をお願いした主催セミナーでは、皮膚科の日常診療における基本を再確認したいと考えました。例えば、ステロイド外用剤や抗ヒスタミン剤の使い分けの問題です。今までにステロイド外用剤や抗ヒスタミン剤が多種開発され使用されてきています。それぞれの違いや特徴を知り、使い分けができることが必要でしょう。皮膚科の日常診療のほとんどは湿疹を見極め、治療すること、そして患者さんの痒みを止めることだと思います。ステロイド外用剤と抗ヒスタミン剤を使いこなせてこそ皮膚科医であろうと考えます。ステロイド外用剤については九州大学教授古江増隆先生に、抗ヒスタミン剤については広島大学教授秀道広先生をお願いしました。

また、「皮膚は全身の鏡である」といわれます。皮膚科医であれば膠原病の皮疹を見逃すことがあってはいけません。その診療のポイントを東京大学教授佐藤伸一先生にお話しいただきました。

皮膚科の診療には美容的要素も不可欠だと思います。美容に関する新しい薬剤や機器も枚挙に暇がない程です。それらは本当に効果があるのでしょうか、採算はとれるので

しょうか。正しいエビデンスを学び、正しい認識を持って診療に役立てたいと思い、帝京大学教授渡辺晋一先生にお願いしました。

そして、やはり今回の診療報酬改定について、皮膚科からみた総括を日臨皮新会長の若林正治先生にお話いただきました。診療報酬改定の話が4つ並んだのは少しやり過ぎの感はありましたが、日臨皮、中医協、日本医師会、厚生労働省のそれぞれの立場からの話で、診療報酬改定がどのように行われるのか、また同じテーマの話でも立場により解釈の違いが多々あることが十分理解できたのではないのでしょうか。

日臨皮の問題点の一つに会員数不足があります。日本皮膚科学会の正会員数10984名に比べると、日臨皮の総会員数は4116名(37.47%)にすぎません。東京都では日皮2171名に対し651名(29.99%)です。この較差は大学や病院の若い先生方が日臨皮に入っていないことから生じています。皮膚科の将来のためには大学や病院の、特に若い先生方の日臨皮への参加が必要不可欠です。それを踏まえて学術展示は日本全国の大学の皮膚科に依頼いたしました。若い先生方に参加いただき、日臨皮の活動や会がどのようなものか知っていただきたいと考えました。

さらに、ある皮膚科関連雑誌において今学会の特集号を組み、展示の中から選抜して掲載していただきました。これは展示に参加する先生方の励みにもなり、見る側もただ眺めるだけでなく、投票する行為によって学術展示に参加することでモチベーションを上げていただく狙いでした。

## **The Professors**

先に述べましたように学術的なことや諸雑事はすべて理事に丸投げし、実際に私が企画したのは懇親会のみでした。懇親会において東京らしさを出したいと思っても、東京らしい料理は特にありません。風景といっても港や夜景はどこもあまり変わりありません。東京らしさは人と、人のつながりを見せるしかありません。

日臨皮常任理事が自分のアカペラグループを率いて歌い、日皮東京支部の大学教授を中心としたバンドが演奏して下さいました。開業医にとっては雲の上の存在ともいえる教授の先生方に、このような形で日臨皮の会にご協力いただけたことは非常にありがたいことと思います。ぶしつけなお願いを心よくお引き受け下さった **The Professors** の先生方には心より御礼申し上げます。私も会頭の特権で一緒に歌わせていただきました。お耳障りであったことと思います。心よりお詫び申し上げます。

私は昭和54年に卒業し、すぐに皮膚科に入局いたしました。今年で皮膚科医生活も30年を過ぎました。その間、大学の諸先輩、同僚、後輩、他にも多くの先生方と出会い、お世話になりました。その御礼という気持ちも込めてこの会を行いました。多くの皆様に「楽しかった。大層らしい会であった。」というお言葉をいただき非常に嬉しく思っております。最後にもう一度皆様には、このような会を開催する機会を与えていただき、そして無事に開催させていただきましたことを心より御礼申し上げ、第26回総

会および臨床学術大会のご報告とさせていただきます。

なお、今年第27回総会および臨床学術大会は、6月11日（土）、12日（日）に大阪の笹川征雄先生を会頭に、大阪国際会議場（グランキューブ大阪）にて開催されます。是非ご参加下さるようお願い申し上げます。